筆満加勢 十四

和書門 類
二七九七六號
八七函
六架
六〇冊

内閣文庫
和書 類
二七九七六號
六〇冊
二四函
二架

内閣文庫		
番號	和	27976
冊數	60	(15)
函號	214	9

国立公文書館 National Archives of Japan

麻疹流行街談録

聚聞奇世

十四

ことしハ盡去に咄席行しハ金谷にも久しかるへきと思ひの
外ほとやかなしきことかきたれ夜かハしハ瞬山の花も盛なれし
まゐりあくさくかるも雨つきつき縁生のおまりうへ人かりしそ
夏の行さけも出て行け見の以のみせきあつハ備しゆくくらに
参りて秋まつらつくまゆのうへ夏みつ出せハきのふも
けふもかうつまゝあるハりて五月雨ハ日ことに雨小風つよく
吹つる横のとともなし又たく此年ハ風にして風邪
はやりさりさとの冬し二月の中比ハ殊の外はやり大坂
道明寺は麻疹をやみさとの此ほと五六人行かれし

いひやうしけるゆゑ白虎狗場まで流行江戸に同じ様なりし
流行かりしこれを何事なとといひ人どしさへ薬麻疹にて弓中
薬種の價倍増しけるなりて薬商人共へ一売買の利を
得たるもの多ひ身を思ふにして東西ともはしりまで流行けり中にも同じ
しかも猫のかずまで多くして大常のいとんかゝなし
ことさらに廿麻疹流行は大躰よ五十一人流行しといふの
江戸にてもやゝかさなりけり廿節の風邪ぞ流行しつかし
して両人ちよきよ私正暦よりたびたびで二十年にして去年まし
以手てし年余の後実の麻疹に流行はいちゆの風疹

麻疹は發斑の類なるべしされどこれを麻疹なりといふなり
されども薬問屋のかきたてありしことを信じて流行んとすべし薬物
大頭首通療所にありといひしかばいよいよ鳳説に
しかして只薬物の市場をみだりしに利を得んと為なりけん
出るもいかなるに両國橋の辺あたりに住居の医師の
中にも首通年より麻疹をやみける人多くきのふ流行年度
流行にて凡百人流行しけふ流行しに夜の流行病に三百人
流行なるといふなと出掛て流行し江戸のうちをそれいはまして
にもうちつゞきいかにして今ハ実に麻疹流行の世の中

とハあまつね、

○宗祇法師の出しなひの分　むしかとめうるといふ

麦飯ハ生まし人かく代はしらに用

さてまつりとハ赤日なりけり

○廿日の祈人を立て何とをもしけれまゝ

川へ流すべき帝の東へ向き商人の来をかくへし

○猫ニ行ふ神のうへきのすしきなく

とかくもしらの行やまゝハかし

○廿日の下比句を懐中し上の句を川へ流せは

むしうかみしけるそ

○蔵をまき商人の来るをよろこひ又三角に切てまるめ年の

分を神の地へ埋むれバはしりかゝるとぞ

○黒豆　緑豆　小豆　各一合ツヽ　車草　五分

右之品を水に浸入てまし七日まで七日の后に出すを

明中まてハはしかを逃るとぞ

○蜂真香　細辛　乳香　大黄　木求　川芎　一方加耳松

右等分に調合して黒焼にして家へはしか入らさるという云

○

御觸

此節麻疹流行ニ付右之用ニ薬種直段引上ケ世上
難儀いたし候由相聞不届之事ニ付薬種屋共へ
以吟味之上此度左之通直段引下ケ申付候間右之通
麻疹之用ニ薬種者左之通直段引下ケ右直段之通
張出し置小前之薬種屋共迄右直段之通売捌候様可致候
割合を以直段相場を 御触流し小前之者へ
薬種屋ニ而売買之節ハ右書上之直段を以相対売買可
致候尤相場下落いたし候ハヽ猶又引下ケ売買可致
様申付候間右之趣町中不洩様可触知者也

五月

寅四月九日

御定相場

一 桔梗 壱斤ニ付 代三百文

一 升麻 〃 壱貫弐百文

一 麻黄 〃 六百文

一 荊芥 〃 弐百文

一 黄芩 〃 四百五十文

一 葛根 〃 百文

一 羌活 壱斤ニ付 代壱貫百文

一 蘇葉 〃 弐百文

一 連翹 〃 七百文

一 防風 〃 弐百文

一 牛蒡子 〃 弐百文

一 和升麻 壱貫弐百文

一 唐麻ニ 壱貫文ニ付 此頃壱貫文 なし

〆 一 右しるべ代価

○ 廿四五年以前ニ麻疹流行すると云ふ 高きの薬店ニてハ
升麻 葛根 牛蒡子の類以の外ニ 困窮いたし立し
處今度ニ至り右の麻疹ニてみ高直ニ売れ 廿四の用薬
今度まして(?)の価法なりし 此ハ其日も川上ケたりしら
河鶴出シ大坂ニ上たる處 いよいよ高価ニ成り 廿四節
後年ニ麻疹流行ニ及ひて却て下値ニ成りたり 廿文
の二麻疹ハ 此年まで悪かりし 廿八ヶ年 以前

此年流行ニ罷ハ 一家門中一人やとまなし 此日の
門門つくきしあとふり やとはしまし 今年ハ なるへく
申つけ候やうし

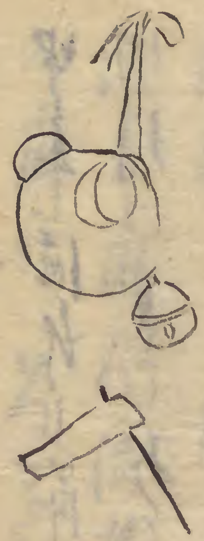
○ 鬼穀ニ炒めて拵へハ 一夜漬 味噌汁ニして 喰ハ
懸かりし 薬なく

○ 大坂天満ニて
金持 壱分二朱 利古 四百文
江戸ニてハ 廿四節 利古 壱両 百五拾文 大きに 弐百文

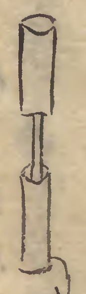
○ はしかと云ふ すめていふ 薬
右二品
紅花 廿葛根 耳草 壱 水菓 湖

○はしか花すゝしあは
亀ふくらの薬ぶや
麦数わらへしや

○子供の腦へくゝり猿と絵をさげる古道はしかのましない之



桙を付ける事もあり
猿のかしらへ黒豆壱ツ服の中へ麦三粒
かし飾ふ足へ本式なりしこゝおく

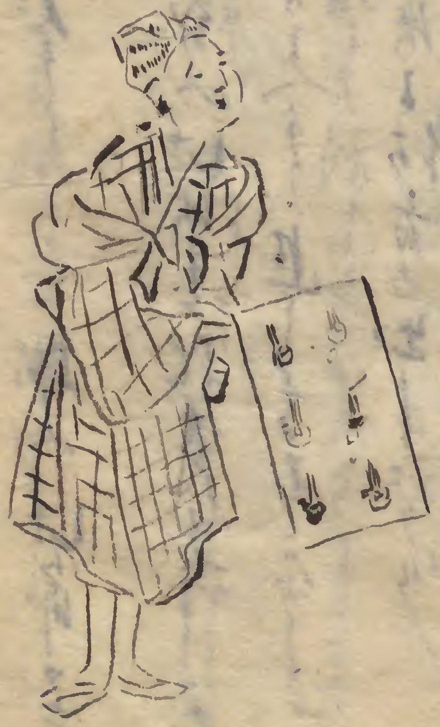


此桙も有

○三浦書
医者の業をはしかはちやの世の中
あにとそ手跡を津道あかるらん
楠の兵法を世に用ゆまへからくするこゝろ

○さるこ絵をはしらへ
あくをうり
はりく

○ましかのましない猿と絵や



○ 緑豆ハもやしニ成 今ニさし合ニ数多 けふ節ニ去ミ不足ハみ

○ 官ノ瓶 杏ハ三草 数多 けふ花を挹 大作ニ入ニ盛ニ成

然しこれハ けしからぬ事也 書キ去りけり

○ 祖師 四ノ月 明化の 頂ニ据ヱ 何者の 出しかたりけん

けしからぬ事 也 と いふ 張紙 ありけり

○ うるさきのかもやらし 大こてありといふから けしからぬ人ありおもゆる

○ 梅干はしかに 大毒ありといふ 恐しておそこれを忘む

梅干十桶 喜りも 梅干 もしかの 味噌 ありけり

川上り 象か 佐 象か 佐てあり

○ 白馬の 飼ふ桶をかふもの ハ かるくする とぞ

○ 芳沢家の遺法く

梅の実ハ 商人の為と 奉とも 高し 世界の 裏ハ 気をつかふ

まく 旅所の 天井ハ かるしるとけハ かるくする とぞ

○ 葱の根をきざみにし 五年切りてに これ木の中へ入てきて 白ひ

をかけバかろしとぞ 然し 去後 移きにし 葉ハ 清きて 不ハ 切む

○ 黒芥を湯の中へ入これまし 温すまいハ かるくするとぞ

○ 節分の 松門にさしたる 松を 七門 ありて 廿本 耳中まハ

かるくするとぞ

一 説ニ 黒豆 数七 角 ありを撰して 闇中ニも いふ

国立公文書館
National Archives of Japan

○御觸

一 此節麻疹流行ニ付病人食用いたし候品物并薬種類高直ニ相成
引上ケ候由右躰之儀致し出候者有之候ニ付平常之直段ニ売候様
可致旨若シ右品ニ而買〆いたし置高直ニ致し売出し候者又ハ薬種等
しまひ候ハ先達而申渡候趣も有之候処相背キ不届之事ニ付
其品も賣買いたし候者共も麻疹ニ付高直ニ不賣様相心得
何れも心得違無之様賣買いたし高直引下ケ賣買いたし候様此旨町中
可觸知

戌四月

右之趣町御奉行所ゟ被仰渡候間町中不洩様入念可相觸候
戌四月廿日　町年寄役所

○当市村羽左衛門座ニ而ハ麻疹ニ付休ミ堺町勘三郎座ニ而ハ
日外さへ休みしハ今の事にてはやりもあらそふつゆへたる寄せ
役者へし貴殿も出るに麻疹休み木挽町河原崎座へ入り
あんまりやすむみのを所へけんもんに御出し役者中のかくく
木戸口ニ

岩井粂三郎
沢村源之助
市川治助
右役者之義へ
もしかたなき為
相休申候

かくのごとく張札出しけり

○去年あたりも此節扶女なぞもしか
して家業やすみなる事ともと
何かよし

御花前ハ怖皆協同而初出相撲
一 相撲ハ四月中旬ゟもし見物殺
到々四手あたるかもしかにし
べし五月十日の頃まで延ばし
なし

○ことのふい

けしかの御侍

まさる めでたや

ハツ おもしかりい

○申

ちしかじまゆう

けしかの術をまり 送れ く

まえおくれ

くれちてかるい

くれねておもひ

まえおくれ

おくれ く

此外にも猿の面をかぶり龍虫證を持し来りし有く

ろうとめとどいもらへたまことおもしろき有といかゞいたしけるハ

さらくくのせ候

此次所ゝ麻疹の妙薬とはいふ有様なり

○同

はしかのかいしやうて
見かけとも
ちからくれ
ちげへ行へ行〳〵

○鍾馗の絵をかざりて線香を焼き家の内をも
黒豆を合湯煮にして家内一生涯に麻疹を病まぬ
事にて麻疹除けと申して絵をかざりたる家にて其月にかくれて
来年も多くかくのめしまへし

○文久二年以前安永五申年四月日光御社参有りける時
麻疹流行しけるハ何者の云伝へさる
世の中のあとつぶはしかも一めんに上下ハいらぬやさん
今度の云伝へ出て
世の中のあとつぶはしかてんてん
松本つて移て果報者

麻疹禁忌

○一 風にあたる事
一 一切冷き物を食する事
一 果物 但くるみハ不苦
一 酒
一 油け
一 魚類 但平愈の後も惣て海魚ハ食すへからず
一 脂のつよき物
○一 麺類 但しうどんハ不苦
一 熱のつよき内ハ強て食をすゝむへからず
○一 不浄の物 産婦 死喪 月水 房事 その外けがれたる事を忌
○一 湯水 但しあたゝめ湯にひたし手拭をつけ身をふくへし

○一 冷る事
一 灸あんまなどの事いむへし
○一 膏薬 薬物ハ
○一 辛き物
○一 柿 渋柿
○一 香物の類
○一 蜂蜜

一 房事 男女交合の事なり
一 熱さめて後も平人の如く湯風呂に浴すへからず 二度とハ不可
右件禁物ハはやり病ハ命病の事 熱さめても七十五日ハ慎へし 平人ハ五十日
百日房事を忌へし 此外ハ餘毒出りて一生の病と成へし
但し○此外の食ハ平常平人食の通ハくるしからず

一 麻疹ハ禁忌大切なる物也 林隆先生麻疹論之
こまかに世にいふ事にせず 依に足らず 印行して人々ほどこし
禁物慎まハ五十日も百日も
生涯の助けともなるへき事
り移るを防ぐへし

大坂庄子寺出所
牛尾氏

再施板
日本橋 某

○吉原町にてハ名主性商を持てはくに娼婦の麻疹をいのりたる
娼婦の名前やとつまりしほど是迄これハ娼婦ども麻疹後
五十日の間休足をやすませ候 おのおのけふより借出ましたりに
なりてなかりし由にいと有がたき御恵なりけりや 此外御し
ゆるさつかれなる夜の雨にもつかれはてしか出ましし
ものなひおやまひにてうせたる人吉原一郷にて一日に五十八人
大門を出して行し人の伝へ

○禅を一合おわし結すれハかろくすむと云 何し老人ニ一合之

○麻疹散を一日ニ一貼づつ三日の間用ゆれハかろしかるものかろしと云
ちかき者の人是ハ麻疹流行の前無き用ひ来りてのかろし
かとも老手になひたるハ用申ろすも及ふまじで人の女
用ひなバ汁師なしかとや見たりと云

一説 味淋酒を十四文買て麦粉拾三文の目此酒に
麻疹をひたし面て吞むべしといふ

○五月五日夕方南の方ハ東ハ虹のやうなるもの年行しける夕日に
映じて赤くなりし紅を引きたるが如し後にハ色まして有りて
け若までもまへすみつふしきに出たりとて往来人のいふに
麻疹流行あまりにでこれをとなる

其説
此年の八月何々西の方に行しか名方まいたりてかくの
如し此年なりしは赤く此方に此後なく世に是にこれ麻疹の
にかりてハ甚しき麻疹なきハ今後これをやむ人目をせすとの天
のたすけなるべしといふ

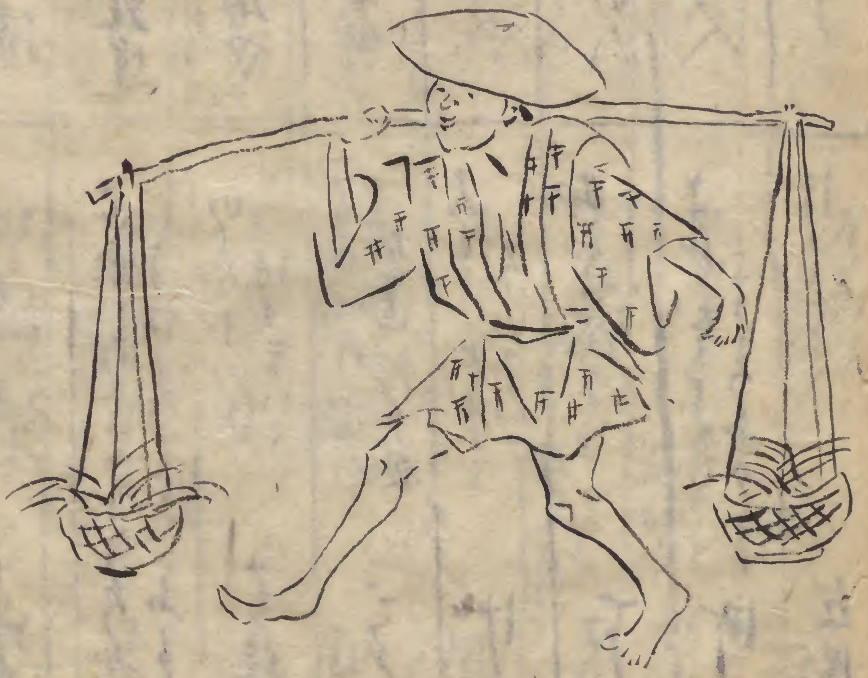
○歳を抱にして一夜痛ハ生涯ちかしかどのかかりしとぞ

久保坊下
撫原家へ麻疹比
ましまいを訪ひし
其図　寿
計ましまいハましれ
守護所出家にて
御部代中川様御咒
松らさ王しう今ハ
撫原家へ出かけ
松らせしいふ名

計浮ましまいハ一人にて
ふさ揚玖一年ハ極まれ
計揚玖し先にて商人の
家をましまいふかふとぞ
早離かましまり
浮つ前市をなし
遠近し男女
共候群集
いとんかく
なし

○看病人雇人十日にして金壱分 雇乳母廿日にて金壱分
此腹立ち縁者の方にて乳母を雇たる人是ハ少しハ十日
にて金壱分前に知りたる僅乳にもらひてくれ
○芝口新橋より本石町十軒店を二階に付商売体といたす
家数七千六軒有りしかとし人の行へ
○多葉粉の脂を溶白魚ハはしかをのかると也
○稲を十本ほとつけ申候たらを其絶にしてはしか
ましないそし貴きたり

はしかのましない
米の病し
一 此に出るとく
にくきを
いろいはし
かんさしく
むすびはとも
一 抱に出るとく
はしかのましない
米の病し



をしか おとぎ

おしんくら見立流し

ゑちごすわ かぶつけて　まいしや様

たつ綱もころへ くる人ハ　まい人親道

うち たへました　つぎ茶や

おせのおもひの 今の身の上　二加方や

おりくなり こたしなり　立意 うひや

はつ何もかう ふうんのとせ　人立 ちがひ

おしかの石ハ 出し　やこひ人

こしや りやくさ　合点す

ちおつく すみで　ちしかうけの くすり

これハたん五郎 手何まつてと　文七女文の ふまうじゆう

かくりまいり 何りまいり　ちゃ飯さへ

こりや少々おじや お道師さ良　ごくいみ

ちりとも あいそいナ　げんき

おやこハ いやし　てんで手立

さいかく本とまでで ごさいらふのう　所から申ひ

ほしさを さいたう　立居 上郎様

ちんあふ何が 出石里まで　かいおろ人

何こへの たらい　きんけん おかし

のびるハこア　やぶいしや

みなちらふて うり　まいどうきん

ことをかくなる おちまり一ます　竹のお売

日本一の　萩爺売の 良

こまへなりこ 行く　いしや屋の この何し

かく何んと おまひ　茶番

大切家内めでたし ふ御仕に　日数十二日目 さんさく何まで あし

みなだし　ご殿く店

中おざの家来を ともちなかり　月何とし

まあひみかうも めかぬ本花　ちんこ ちかだい

かっいふなが いやさに　風呂屋

ちづかいやと かなかしい　むすえさかり

ごいをて先んに かざん 世手や　ちしかの 大竹様

おかたにちて かこさいをの おもてもてハ　会様人

いちいなア りたしこそ　新道の ころし鱼

干様万年 楽太十

おどけなぞあこぎくさ

もしか
并て はやりあい物

こ婦く店の もしか　トカケテ　はくせう女郎　んハ大ぜいかする

日たなの もしか　せいとんぢやい　見せものえて　はやりあいする

ちかけの もしか　やぶれがさ　さていでもすて　られぬ

なしかの あいこう　角の芝居　おもちや　手あそびん　ごかけて　ひつこむ

年寄の もしか　雨のたてし　若い者につき　あい

たびでの もしか　さいめでた　はなしもききこも　ゆききかたし

おもひもしろ　いしやの二のあし　めききのちぶふ代物　見ききへおうせ　見せ

そらか曇て　さんぐらりき　かたきき　ぬすす人　ひやうだんりたらい

おりきの もしか　茶のさかりの　かこそ　する

ぬすす人の もしか　こんでうかくいいたい　ごろぞ　するやう

大阪中の もしか　ちんりうし　あくさつ中し

そうらの もしか　こうじ見きて日　ち見がやすみじや

ざいろくの まん世　けい節の芝居場　きらいふけいき

夫婦の ち拝みり　らんきうの芝居　まめがちや　ますする

革羽織こ いしや　竹田のからくり　大きぶとふけじや

かおかきの やつこ　角も引組　大きくてやりまに

竹のうに うちをや　つどまて　やすてもかいでが　あい

もしかの すたらに　あらうく人　小節と役の出を　こみたふかりや

もしかの ごまりあい　北さきのえんげい　見ふいすらしや

おやまの もしか　あめふりのかき　さゝすにいふまし

うやくあかの そうしか　足もとのたび　山をあんしる

きんかんと ありし　諸者の都見せ　きらいあさけりや

かかみゆひこ 氏子屋　手紙こやいて　見ろふあく

さんさんじ　うちく　まつりかうかや　顔のうちわかくる

座本 氣進内之熙

此頃去方此ゆり
ゑ合り

世の作比
あおろふ けしか

ふたいとに
花あしつし
くるふあう
居てまへ

是後吉柄無

若し流 随く讀

安永の甲ノ午ニかいそ足る老人のせいろうもしかけはし
まし御免の津ぬ筆者ろはぬほしあいの口んまそえつし
御追善の出立リロハ さしつく郎廟ハ津ろ数の趣
おかし
高和のまへ年にめつたに如歳のうしろの病つき 何お何し
何ぶまし 枕の陳ぶ筆能ふくぬ はいさいぬ れらしと見へ
業のにへ三 ハ八本像の切ちと綬

はしめ 影画言	ふ南り 堀花
目心するがの手	ちりけ 居
からだ 丹後	出そぞ 伝
うちち 二條三郎	便ふ目 忠郎
自書方 まじあひ	持ホかんお
むつ用泡し出	名づきなん居
女房のおせ	出血出ル
おごろきおさつく	いる白へ はし郎
あそんで 新女	鷲浴麻し介

三十上し助	大かさせん居
竹の子十郎	ろ以嘉参郎
刹戸金拇左三	土庭上下十郎
天青戸ゟ成	いまそ門居
病とどく西居	麻むくおかいの
茶のせん司	十津門すえ郎

道行 ありし嫁枕

けいせい田和琴 むごい おつ居
あの二あく勝年兩 味蔵 出来三郎
右病人きまち御し

三麻かたり
宮古芹太夫
ワキ 浅麻ヨ太夫
三味しい 世为一流

もし湯宝	田し麦人居
娘おつ子	白井 堀居
分掟村年寄	大酔五左衛門
手綴て帝じぶ	赤り八 門居
喰くの如	うつ湯よ右卿
御老不合の菜	座本 気進内し魚
浄るり	鑓 嘉太夫
三味線	け之 滝安左衛門
虚言	近江 あんた
作者	芝から せん作
口上	出あり 太吉
頭取	うく成 堀居

年寄ハ 千穐万歳楽 寸

石上庁 桜行えつるとを鏡波がいうたまハこうて紙代
桜元 あかりく二巾の口ハいつも長
先えいたし 宮彫

疱瘡麻疹のはやりしとき図のごとく猿をまはせし
ひきわりて飴を作りなふるの大鉢をもてしき自らかなる飴の
切紙を四はしに花を付てあまたかざし色の紙かしにて飴の文字かさりの附
の飾りにて町々を売ありく

御柳（ギヨリウ）といふは今木の枝葉ふとし對して其足人を寛し開ゆれば
ましかるしといふ
是ふハ万年草のめしあてらそくまでくあひきとしてつくしきまつく

本草に檉柳と作りことあらん　痘麻疹良方を入れりして
檉場で出る

人参　風年　織り出

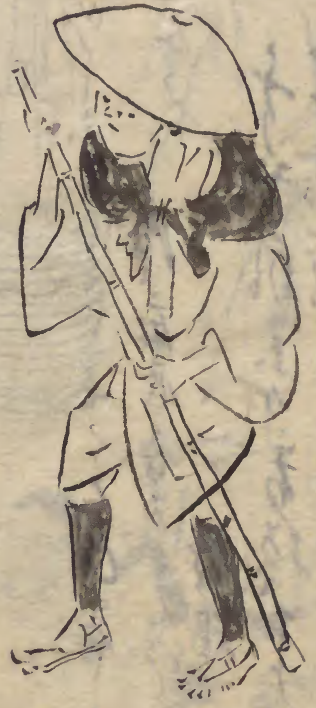
はかおし

すりわり風茶の前提へおて机をとして
まし幼はまじこもせしきは草
迎えしえかけたり此もの一こそ
お酌しけもし

わらわら
はしかの
かるけ合
かるい
あとじや
くく

○チヤカニタエ　らもし

牛宮屋氏小日向辺を並行しける所チヤカニエこまひ行けくを行けり
それハ此かゝるものにそ行し日ゆりそを聞ひしにもしらおでハ
三家ゆく老てある江戸の者にも年や知其道者にハかく此様た大路
まづまハうちあかきいといふすてかゝりしもそれをたりいふ
あるも其の様也チヤカニエとハ東雲物まてそも　ほるやふんこむまける
茶店にて此の者に三本の物事しけれ行の此者にてしけ篇
三麻疹流行之時かゝる所をしるまとひて山屋をもの行けく



牛込辺にて流行りし堂外牛宮御氏の書留之

○

開帳

高麗国縁起郎大麦君立村　二麻布山　流行寺

掠これに至るものを其の日の出さしく之

三嚴
浄家　善權如来　高野一流上人の胎年にして祝を行たるもあらん之

大徳大病祈祷の時を　病年芸薩法位

薬師観音　大やくらん調方米の法施　ひこたび授する

出方ハ善權三いろ人ともの加きけいわりいふ法折芸館　中田君

右南四月比ゟ森いよ日数百日しる旅南山かいいあろせしむ者之

文五月　日更　十二日ゟもしかめる

○ 五大切（ごたいせつ）

一 およそ人はおよそも万事何事ことに血気にはやるかたにおこらず
とも茶湯いけ花の学芸すきなれども合せ生けの心うちこけし
なる事はくるしからず大切さへ守り候はゞ何事によらず好みてもくるしからず
とりなしたるへきものやはしきことの外とみえにもあるまじ

一 此八ヶ条は江村何某といふ人の言葉にて候所（げいしやかもん）行義にたゞしきの心得（よのつね）
五大切といふ物語にて世のたしなみ やすく人々似たる事を其心得を思ふまゝに（つくりて）
甚だやすくかつ人のたしなみ有ところなり（あたり）

五大切（ありがたき）の本文

一 およそ万事のおよそ事にあまるまじきは何事思ひたる人へせられて稽古をも
まんじ此節の事ともに学び合ふたしなみの心うちをかけて手ならへは千ならぬ
事大方さとりあらかじめよいろいろの事はふせいやがてあとさまかたへ
おしき事ともはかりがたし

○ 六畳所 小林何某夜の出合に人しれぬ宝みどころつくしの
徳を聴き出して清浄の身を浄め麻疹あるべしとて一道修行 （大阪夏 小林 何某 十二月）
をまねらせかけりにはるかにても風邪にても寄らず何事もよろしく
ましをいひしけるにそれも人々いはく疱つかへ有る事有をと
ひとしきりたれはよくいけにて何がやらんとて修験者に祈らせ
けるにそれもいはずこれは麻疹の神なるがせり疱瘡神
をまつれども是をまつる事の事しきりに祀りて今はしなに托して
そしゆるりと何方にも候ものご祈念の十日より小豆飯を神に
年頃へよくすまるは福禄にかくてもしかと慎くさするに能定かにはなく
いかにぞて万事をとりよせ

山椒大夫在明神

五月
寛法十日、小豆飯だいかうにたんぽぽん
やすきことふことさきそうへ餅
かくのごとくあらしたりといふさけ見えしにはかくすまいは。

ありさりける人かくあるせしあそふしきなる人く来りて
これをも文字よかゝさましハ何と申しそとといしにそえたし
又筆をとりて
一　うんをみるすゑうんとかなをつけたり天ゆう
おしくのおくまつかへしゆるくなしをさまりと祈りけれハ
今よりハへし表へをひらけよとて表へハ度の下掃部よりハ
いてくるの御かくしとけるへけれハ今何ハ裏へ出ゆかん
ひそしを免しハつとおりき上りて裏への障子をしし出てくるか
を張抜とくふしたる人ハかきけるまてしこその居所へ
つ目て来り書なと何かへけれハ作家く正すさ参りたり
これより此病中にてえてたゆめたる神号を振付して麻疹

のましるいそし継やしきなる出さりましし何か人来りて
かさりしまこてにえりん

○

志もしくの流ら孫

升麻葛根荀葉草竹四味剤法諸書一流の此麻疹よとさる
一道者の何かきらんやさとくハかるハ熟て良しひが来るもてしてちよろって
それ也てやる張出たる果ハ直学鈹に於て扁桐奴僕こまいたる
荻井の枢庵下より萬さん安永五年ハ両年[illegible]し木八年肩目の
たへハらんと皆保をも下やアこさりけせぬけ天けたのいそがしく
楽くへえ出ふてえて何も八此致に風と月五ル扁書の上り
去さるのが和[illegible]天皇錢だら頭痛御悪赤み面てハ疹喰
鼻血乃浅こいつれも何のるそふかとたへもふくの一[illegible]り
さむしけかてるら前しとの大なかいけのこぬろちにドりや
一ふくおめにかけよるるア一つ中も於へかるいちにえせ此ハ

まして疹治りて後食合養生悪しく出候てさいごすことや
何のかひもなし只服薬人をやとひ下り病の麻疹めでたきを明く
つゝしむべし薬ハ若七八歳ハ能々御代万民録[?]
たがひあれ功を仕へ今此時もしいかなる事もなく大尾
南部宮世の不定是やうても振り命定め年今春の後ハ七十五日
禁物居生慎しく是人ともに禁日

○麻疹後眼病あらハ田貝の汁にて洗てよしと申候此卵[?]なしにて
これを売れり　又黒貝でもよし上腸迎えれハ気を付

○秘薬御合所にて出版して多く売出し是ハ麻疹にて死ぬ者多き
ともへ薬物を下しける

○懐妊の者の麻疹にハ産後し時百年来の土蔵の壁土を煎じ
用ひてハ胎をまもりて安産なると申候　又伏龍肝もよしといふ

○唐芋[?]麻根　艾葉等分に七八浜榔子の末を和して用ゆるハ
これもよく胎を守りて胎やもあやまちなしと申候

○上州天道に
鹿の湯をあむる時ハもしかれろし候そ

○上方筋の者麻疹にてんしきの湯まいれ人々喰ひ付よし
江戸にも何方にてもしまりしといふ

○積を麻疹やむ人の手さする積に枕の下へ入置ハよろしと申候

○懐妊の麻疹にハ蓮の葉をうらを煎じ用ゆるハよろしと申候

○又蓮の[illegible]抔蛤貝黒焼等分これを細末にして
一度に二匁ツヽさ湯にて用ゆるハ安産なりといふ

○麻疹疫瘡

まじなひとも

図のごとくなり

瘡ちやく

此図上下わり

これハ

猿と道三の

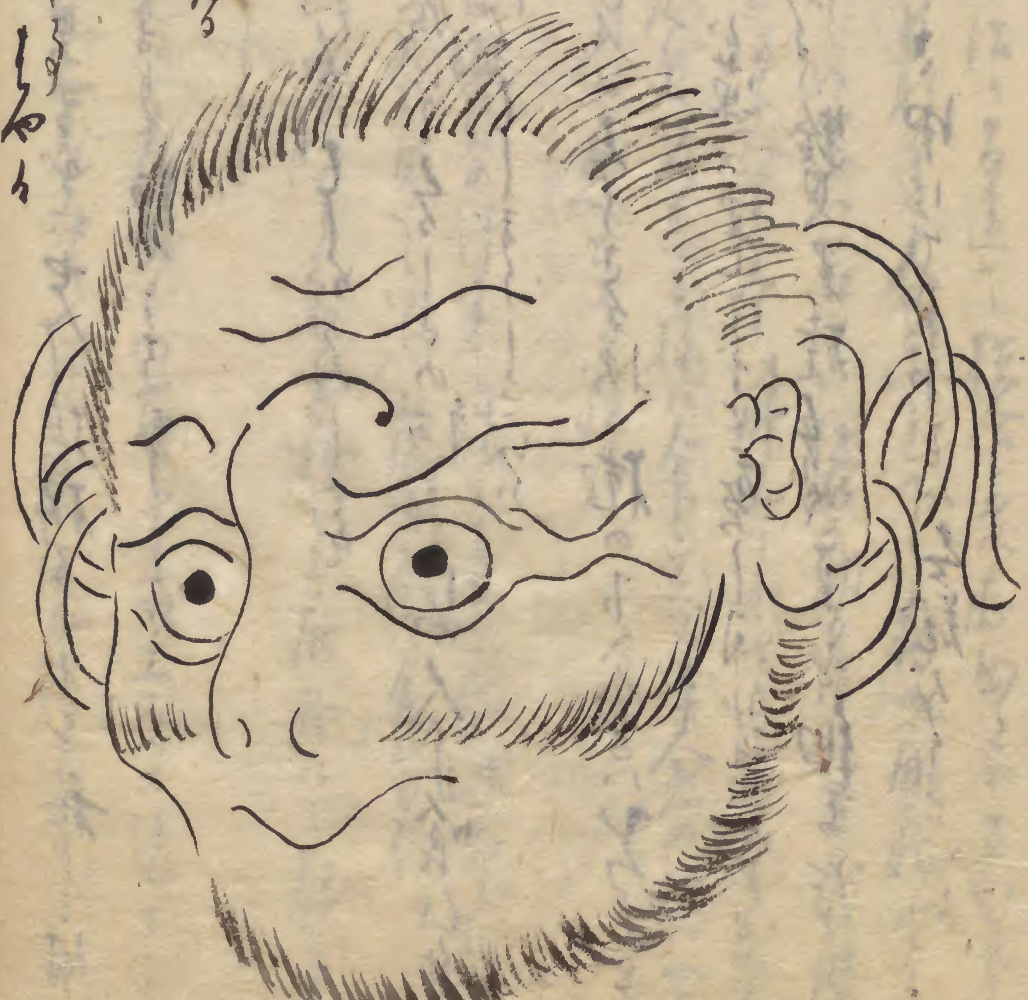
面なり

此後これに就しなる

扇しなる面を

工夫して売らくするもの

ある



○赤坂之浦稲荷御宝殿ハむかし南光坊此所縄張にて造られし

ものの古きは法度寺なりて今に至るまで一度も大災なきは

信じ霊む事けれバきまぐれかはりてこの庭の土をとりて

懐妊の者麻疹に付様ぬよしにかゝりしそて許し[illegible]ことを

相受せんとて来る人夥し

○麻疹治法の書附れ書肆より多く出たり

麻疹は廿年経にしもまた先の如くはやる事あり
かりしが五月中比より世にひろくなりまでも日ましに
くせぬ人おほく一日より四ッ谷御門を通りし葬礼百
余、浄(?)薬の法へと百十八座りしといひもてさはぎ
いふたつまきを行きこのふかのは縁を日ましつきて侍りけれ
桐ヶ谷と落合の火屋にも寺(?)はなし、世の賑はひも今は
すさまじきまでに覚ひ侍りける中にも、しかるみせもし
かはりものもかしまひしに、わやまちも知らしこれとても
てなるからやかましかいなどいふにも百にひとつもなかりし
皆あやしむべし、くすりもけしなる故にそうや

一両へかしたかりはしかの事也とて行まなたうときまうし
先に麻疹はやあらんなどいひつくろひける所ことに一めん
に出来りをつきてはやるものかに書しるしたしといふ如く一め人
に出するうへハくすしたらにとりこれもなへしこれを
おへハむかし園中に脊(?)安(?)霊とかいひし人小児の一言を
まなびてむ積沙(?)をききえおぼえに世にひろまりしかに
所くハいふらし役せきる時これをもんて豆のあし所し生死を
はかりける百にひとつをたがへず、実あり、銭をむさぼる
そのころひて何なりんと謝礼あるし、去るもむへ
今のくすしハこころひもしかと俺(?)がものを五百人所つ

かゝれハ古人語せしあさうあとあとかにいへとそしらぬ語すつきて何の中へゟ病する業ゆく病をやせとも人の命を延ゆるかそかまへし天賦定離のかきりある人命いかゞあして弟の根本の枝のたくひあるかくらんやたゞ業を用ゆいまやまひをかろくしてたのまるゝことをとゝすしせんかあるへし其のくすりハまさるつゝみ命縁とうかひあかり命死りいくまゐをまたいにしくハ親のやかるとの寄餅を塞しくたつ縁こそ縁をとうかびしも命ト為合の縁といへる着頼を此為しくすまとあかいま何がし命おしきまゝにてあきますしおしたとへハ

こゝろひなしかみおこなひにつきてけんとし此みもしつむをあやまちひのひろし例の筆しますかせとしかいつけおけも後のたゐみあらんことさ本年のまかいふてたた嵐のまちふといふあり中して命をたちか之年とせちかきのちのまを記しおけハ馬やまらけん医やおん

文宝亭 誌

一

享和三癸亥此年水無月十日何がし

国立公文書館 National Archives of Japan

追加

續日本記十二

聖武天皇天平七年是年天下患豌豆瘡俗曰裳瘡夭死者
多々則豆瘡也同十年疹瘡之則麻疹之

栄花物語ニ

長徳四年例のもかさにはあらていとあかきかさのこまかなる
老たるもわかきも上下わかすこれをやみのゝしりていく
つかみなるも赤もかさ万寿二年七月ころよりハ麻疹瘡といふもの
いてきて上下ともにやみしるましきものこひやすく
人のこゝろひやむなり
赤麻疹瘡にて此宮殿の姫小式アの内侍なとも〳〵れくなりし
なりゆくまて懐胎なとしてうまれなくなりしなり

自天平十年戊寅至長徳四戊戌　二百六十一年
自長徳四戊戌至万寿二乙丑年　廿八年
自万寿二乙丑至文明三辛卯　四百四十七年
自文明三辛卯至永正三丙寅　三十六年
自永正三丙寅至天正十五丁亥　八十二年
自天正十五丁亥至元和二丙辰　三十年
自元和二丙辰至慶安二己丑　三十四年
自慶安二己丑至元禄四辛未　四十三年
自元禄四辛未至享保十五庚戌　四十年
自享保十五庚戌至宝暦三癸酉　二十四年
自宝暦三癸酉至安永五丙申　二十四年
自安永五丙申至享和三癸亥　二十八年

○宝永五戊子ノ歳三七年目流行　是ハ町々所々大抵ならく　宝永ハ湯ニ入る麻疹享保ノ頃は…

右之麻疹流行の年天平十年より今年享和三年
まて千七十年の間十二度流行
文政七甲申春ゟ流行享和三亥ゟ二十二年目なり

○品川のなにがし女二麻疹後なにがしの家来りけるに産なかりし、
にて産中の子ハ腹の中ながらにして死たるによりてなかりし
たゞすつぱにて又合せしかハかしの為にまた女ハ死たりけり
けるハ腹の中にありいかりのしるしなるによりてなからうちおこる
て彼女のなげき此女の佳日金を出してもとむるならずしてなかりし
ますみたりしかのあとの人来りて語る

○中白ヶ切かしこ許より□とて男ハ本村に三二日女ハ当
きつて来たりけるにも夫婦のもの腹家まかしく
腹した中より□のなりけりまたしてなん世をもたりけるがしけ
ころもしかるにやまひにてふたりともにおなじ枕し
ふしたりしかどもわづかにさらにやみけれバ今ハ
くすしのいましめをもうちすてましけん例のまきつめを
なんぞもしれらずしけるに十日ほどありしもおこたりしことなき
ハ救がたきりもなくつけも夜なりやまたなんとへなりも
下なるもまたはてつかりもむなしくなりしこなんかる
夜を残なとものの又古き人のまのあたりみて待りしこ
かゝりつへし此めるまじけれバこそ

○葛西新田本宇村内堀井弥こゞねなといへる村にて麻疹後
を送り出して後大なりたりけりしかし彼なにがしの人語る

○又民部加太吉紀小松村といふ村の百姓なにがしといふ者の
娘も付そへてやまめて麻疹をやみはしりし病中に小児二人

来りてこれハ麻疹の神なり汝がなやみしくとも命にかゝはるべき
ことなしやがて全快すべしといへバ此家を出行てこれより一軒
行ずなる隣の家にうつるといひて出ていにけるかき
けしてうせけれバはたりにしつ此娘などもみな全快をなしけれ
一軒隣なる家にて麻疹をやみ付しかしか娘の悲しく
此娘といふハ本ら婦なり死なく
此以後麻疹流行にハ此疱瘡神をまつるがごとく棚をかざ
りて供物なとそなへて もしかの神をまつるやうにすべし
これ年ら未来記なり
文政七年初春より流行すすでに一万所小麻疹か家をまた
うけ来りて麻疹中日々そなへ物としてまつりけるを見得べし

[stamp]

国立公文書館
National Archives of Japan